これからの百年を思い描く足場のために——『流民（ユメン）』を読むすべての人へ

斎藤真理子

今からちょうど半世紀前の一九七六年一月一日。

韓国の新聞『韓国日報』の元旦の紙面で、新しい小説の連載がスタートした。

タイトルは「流民（ユメン）」。「流浪の民」という意味である。物語はある夫婦の会話から始まっていた。ほのぼのした家庭の一コマというわけではなく、子供をめぐる深刻な話題である。

『韓国日報』は最大手の『朝鮮日報』『東亜日報』には及ばないが、有力紙の一つだ。年のはじめから気の重い内容のこの小説を、読者たちはどう受け止めただろうか。

だが、作家の名を知る人にとっては、小説の中身より、この人が新作を発表したという事実そのものの方が衝撃だったかもしれない。

その名前は孫昌渉（ソンチャンソプ）。韓国有数の高名な作家であると同時に、ここ何年かまったく動向のわからない作家でもあった。

かつては一九五〇年代を代表する作家だった。人々は彼を「戦後作家」と呼んだ。この「戦後」は「終戦後」ではない。朝鮮戦争は終結したのではなく休戦協定が結ばれただけだったからである。従

って「戦後」という言葉に、新生活や再出発の輝きはない。朝鮮半島が南北に分断された状態で戦争が始まり、休戦を迎えたとき分断はいっそう強固なものとなっていた。おびただしい人命が失われ、生き残った人々も疲労困憊していた。

孫昌渉もまた、大勢の避難民の中の一人としてどうにか生き延びた。そして、休戦後の暗い世相と希望のない人間関係を容赦なく、ときにグロテスクに描き、特異な作家として注目を集めた。代表作の短編「雨の降る日」「死縁記」「生活的」はいずれも、酸鼻をきわめる不潔な狭小空間で疲弊した人々がうごめくさまを、これでもかというほど生々しく書いたものである。貧困、飢え、衰弱と病と障害、虚無と不信と絶望。病人はあっけなく死んでいき、残された者は涙を流しもしない。死はあまりに身近というより生者の身体に食い込んでいた。

救いのない現実に極限まで顔を近づけ、腐臭をとことん吸い込むような小説だった。しかしこれほど至近距離に近づくと陰惨もただの陰惨でなく、別の何かに変容するかのようでもあった。そこに、現実を踏み越えて生き抜く力が兆す余地もあったのかもしれない。孫昌渉は露悪と自虐を恐れず果敢に書いた。一九五〇年代はそのまま作家自身の三十代に重なる。いくつかの文学賞も受賞し、一世を風靡したといっていい。

しかし、一九六〇年代に入ると徐々に作風が変わってゆく。新聞連載の長編小説を手がけるようになり、恋愛や結婚、性、また加熱する受験戦争など社会風俗を取り上げて新境地を模索したが、短編ほどの切れ味はなく、通俗的との評価も聞かれた。一九七〇年を最後に小説の発表は途絶えた。そして一九七三年には突然、日本へ出国してしまう。かくして、一人の作家が人々の前から姿を消したかに見えた。

その後突然、新聞で『流氓』の連載が始まったのである。しかも日本からの送稿で。このとき孫昌渉は五十代半ばだった。

『流氓』には、従来、孫昌渉が描いてきたのとは違う人々が登場する。在日朝鮮人の一世及び二世である。植民地時代に出稼ぎや徴用で日本へやってきて帰国の機会を失った一世と、日本で生まれた二世たち、それぞれの生活と意見を映し出す小説だった。そのこと自体が異例といわねばならない。文芸界のみならず、本国に住む韓国人が在日する人々の存在に心を寄せることなど、ほとんどなかったのだから。

孫昌渉が在日作家と交流した様子はない。在日する一般の人たちと深いつき合いがあったようでもなかった。そもそも人づき合いを極端に避ける性格であったことが知られている。だが、この時期の彼が、故国を離れた人々の哀歓を描いて本国の読者に読ませようという意欲を持っていたことは確かだった。もっといえば、寄り添おうとする姿勢もあったのかもしれない。

それはおそらく、孫昌渉自身が流浪につぐ流浪、まさに「流氓」そのものの生涯を送ったことも関係しているのだろう。

孫昌渉の詳細な経歴は巻末の宋恵媛先生の解説に譲るが、その最大の特徴は、移動に次ぐ移動の人生だったことである。

一九二二年に北朝鮮の平壌（ピョンヤン）近くに生まれ、十四歳で旧満洲へ、続いて十五歳で日本へ渡った。二十五歳までの十年間を日本で暮らし、日本の敗戦後、一九四六年に朝鮮半島へ帰還した。だが孫昌渉の移動はそこで止まらない。三十八度線で分断されてしまった祖国で、南から北へ、ついで北から南へと二度の危険な越境を経験している。そしてソウルで作家生活をスタートさせたが、その直後に朝

鮮戦争が始まり、釜山（プサン）に避難を余儀なくされた。

避難民でごった返す釜山で孫昌渉は、日本から夫を追って釜山まで来ていた日本人の妻と奇跡的に再会する。休戦後ソウルに戻って十四年間過ごした後、こんどは妻を追って一九七三年に渡日。そして二〇一〇年に八十九歳で死ぬまで、韓国に帰ることはなかった。

渡中（渡満）→渡日→帰国→越北→越南→渡日。何という複雑な旅だろうか。九十年近い孫昌渉の人生の中で、朝鮮半島にいた時期は半分に満たない。『流氓』は、異邦人が異邦人を描こうと努力した痕跡なのである。

一九七六年といえば、韓国と日本の国交が回復してからまだ十二年しか経っていない時期だ。植民地時代の記憶は今よりはるかに色濃く残っている。一方、日本との経済格差は歴然としていた。韓国は貧しく、また、朴正熙（パクチョンヒ）による軍事政権下で野党の巨頭・金大中（キムデジュン）が東京で拉致される事件も起きて、手段を選ばない乱暴な独裁国家というイメージが韓国にはつきまとった。日本の知識人たちの間に、朝鮮民主主義人民共和国の方が大韓民国より先進的だというイメージがまだ強く残っていたころである。

二年前には在日青年文世光（ムンセグァン）がソウルで朴正熙大統領を狙撃し、弾が外れて大統領夫人の陸英修（ユクヨンス）を殺害するという恐ろしい事件も起きていた。韓国の人々が在日同胞を見る目は厳しかった。そんな中で孫昌渉は一人、『流氓』に心血を注いだのだ。彼の著作年譜を見るとき、この小説は実質的に最後の問題作であり、渾身の一冊といってよい。

しかし、当時の韓国で『流氓』が話題になることはなかった。連載が終了しても単行本にならなかった。一方、日本でこの連載を読んだ在日朝鮮人もゼロではなかったはずだが、それが在日社会に何

らかの波紋を呼び起こした形跡もない。東京・東久留米のアパートでこつこつと書き継がれ、郵便局から国際郵便でソウルへ送られたこの物語は、当の在日朝鮮人たちの生活の頭上を通過し、確かな手応えを得ることもなく埋もれた。孫昌渉はその翌年『韓国日報』に高麗時代を舞台とした歴史小説を連載した後、完全に絶筆した。こうして彼は、本当に忘れられた作家となった。

連載終了から三十年近く経った二〇〇五年、ソウル大学の方珉昊（パンミノ）教授によって『流氓』は初めて本として実践文学社から出版刊行された。本邦訳はこの書籍版からの全訳である。

激しい流浪の人生を生き抜いた作家が、作家人生の終盤近くで造形した在日する人々の群像は、約五十年を経てなお生々しい存在感で迫ってくる。『流氓』は、ある共通の歴史を持つ人々の群像を志向すると同時に作家自身の来歴を示すものであり、また他ならぬ日本社会の肖像でもある。日本でも世界でも排外主義が渦巻く今、この特異な小説を読む意義は必ずあるはずだ。

今まで、日本で孫昌渉の文学が翻訳される機会自体が限られていたが、特に長編小説は本書が初めてである。巻末に併せて収録した短編「生活的」は全盛期の代表作の一つであり、併せて読めば孫昌渉の全体像に迫ることができるだろう。

孫昌渉と、彼が作り出した人々に出会うことは、この百年の朝鮮半島と日本列島を巡る人の移動に思いをはせ、流浪の民一人一人の胸にたたまれた思いに気づくことである。我々にはそれをたやすく再現することなどできないが、再現しようとした人の熱意を感じることで、何ほどかの接近は可能だと信じたい。そこに、これからの百年を思い描くための足場も重なってくるのではないか。

では、一九七六年の新暦元旦を迎えて朝刊を開いた韓国の市民たちの目になって、小説を読んでみよう――。